

斯

誨

衛

淫

for Adult Only



誨
淫
亼
斯
衛

衛斯淫誨



……洗い出しを
計り……う
ツ

す既に……
段階……的には
最終……う



はい
不知火式開発は
無事 円熟期に
入りました



現状のまま
実機訓練を続け
残る課題の見直し
……



ん？！



このまま……
いけば
何も問題は——





さあ

続けたまえ

モッ

モッ



げ 現在
— 予定では
— ツ!



は は……い
次……に
明日以降の
演習についてです
が



ひ……
うん
ツ





早く答えて
差し上げなさい
失礼じゃないか

タカムラ中尉



それ……は……
……ん は ねは

それは？

それは
どうなのかね？



んんんんんんんん！？



は……はい



失礼を――







その代わり

!?



あ、ありがとうございます
ございませ



君の好きに
したまえ

不知火式型の
件はわかった!



んッ
ふむむむむ!?



くッ
むう……

ちゅっ

ちゅっ

ちゅるるるる



ふぐっ

ぬちゅっ

ちゅる

ちゅる

いつものことだ
不知火武型の開発を
円滑に進めるための

ク……クヒヒ
……ハハハ

どうってことは
……無い

相変わらず
素晴らしい
身体だな 中尉

ひううっ







だから



うむ
そうだな





すっかり感じて
しまっているようだ

これは

おお

ぷぷぷ

だから
…ユウヤ

ほほお
見てみなさい
皆さん



ぷぷぷぷぷ



ユウヤ・ブリッジンス少尉



…だから
ユウヤ

それなのに
また
踏み止まって
いられるのは

何を… いや
誰を想って
なのだろうねえ



君は強い

フフ
年甲斐もなく
妬いてしまうなあ



随分と彼に
ご執心のようじゃ
ないか



……えり?



本当に
強い女性だ



ブリッジス少尉の
転属くらい
わけもない

例えば
そう――

だが、タカムラ中尉
我々の意向一つだよ



ユ……ウヤ

わたしは



トップガンの腕を
最前線で存分に
振るって貰うのもいい

何故か
整備不良の新型機に
乗って……ね

おろお



おろお



なんだね 中尉
もつとハッキリ
言ってくれないか？

ん？



……い
します



それにくて
……臭

ふう
はあ……

……熱い

こんな
汚いモノ

……私
は

ふんっ
むう

おお おお
いい……ぞお 中尉
いつもよりいいかも
しれんぞ ハハハ

ま まったく
腰が砕けそうだぞ!

こらこら いかんな
この期に及んで

そうだぞ中尉
君は自ら望んで
チンポに奉仕して
いるのだろう?

んっ

勝手な……
ことばかり……

はい

なら胸だけでなく
舌も使ったらどうだ

そら!

ひゃっしょ!?

おいおい
それは少しばかり
独り占めが過ぎるの
ではないかな？

そうですぞ
このようなスケベ肉は
皆で分かち
合わなければ

むう 確かに

仕方がない
まずは一度

我らは人類のため
一丸となって
協力せねばなり
ませんからな

射精だしておくか！

ひゅんんんんんんん

あう

はあん♡

ひゅんん



アッアッ



アッアッ !!

よ
よおし!
で
射精^でるぞお!!



お おお!
まだ まだだ!!

い 息が
出来なっ
ぐううっ

んぎっ
ふふふっふふっふふっ!!

んぶあ
あー……

さ 流石は
帝国斯衛

ぐぶつ

搾り取られる
かのようなだ!

あつ
あああつー

クッフッフ!
さあ 新しい
チンポ様だぞ

はあ はあ

では
我々も

そうですねあ



わ……たし
壊れ……ッ

ニジュニジュ

んぶん

ぐほっ
ひぶん

やっ やめ!
こん……な

おおおおお!
中尉は衛士としても
一流の腕前だそうだが



私を……
守……って



ユウ……や……あ
おね……がい



そりゃあ こんなに
スケベな身体をして
いれば 仕方が
ないでしょう! くっ!

チンポの扱い方も
一流の淫売だったか!

ははは 美味しいなら
『御主人様のおチンポ
美味しいです』と言って
みたまえ!

どうだね? 美味しいか?

美味そうに
チンポをしゃぶり
おるなあ

なんて……
……下衆なツ

発言はもっとはつきり
明瞭に述べたまえよ
タカムラ中尉

おい……です

んー?
なんだって?

……しい……す



美味し〜です！

ふん

ふん

御主人様のおチンポ
とても美味し〜です

そうか そうか！

あつ
くひ



なっ なに……を

こん……な
お尻の穴……
……なんて



チンポ好きの中尉には
是非とももっと多くの

チンポを味わって
貰わなければなあ



ちんぽ……ちんぽ





今の…今は
今の…今は

なに…？
なんだった
…の？





プレゼント
だッ

んおほおおおおおッ♡



おっ おお
これはッ
予想以上に……
クッ!

うそ……
うっそ

お尻の穴に……
……私

……チン……ポ
挿入れら……れ……?



まったくイヤらしい
ケツマンコだ！
私のチンポが喰い
干切られそうだぞ！



どうだね ケツ穴の
処女を失った感想は



そら！
動くぞッ！



動いて……んんッ♡



大きいのが
お尻の穴

いやッ

ほ♡

おんんおんおん……

らっばらっして



私は 私はお尻の穴で
なんて……感じて――

ちちがっ



グイグイグイグイ



さて そろそろ
こちらにも



あんしん

あんしん

随分と君も
気分がノツてきた
ようじゃないか!

ああんしん



ユウーヤ……ツ

こんな
私

こつちもしつかり
奉仕しないか!

この淫乱娘め! そら
大好きなチンポだぞ!

身体中 おチンポで
犯されたら……私っ

んぶっ
んぐんぐんぐん!

きも……チ

キモチ 良く……ツ♥

やっ♥ダメっ これ



ぐううっ!
そろそろ
射精そうだ!

♡
ヒヤッヒヤッ♡

♡
こころちもっ

♡
ひびめっ♡



ううううう!
だ 射精すぞ!
ケツ穴に初ザーメンを!

ダメッ
ダメエエエエエッ♡



♡
ふああああっ♡

おかしく なっちゃう
私 狂って—



このまま
ナカで射精されたら

♡
ひびめめめめ♡



あゝあああ
おおおお♡

クッ♡

クッ

クッ♡



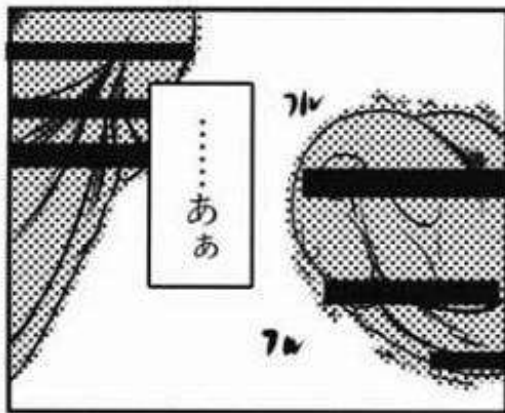
チンポ汁う
いっばな……♡

ぐしゅ
ぐしゅ



いやあ
ああ……♡

やっ♡





安心したまえ 中尉
君を満足させてくれる
だけの物量が
ここには充分にある

おやおや
まだ足りないよ とでも
言いたげな貌ですな
タカムラ中尉



また……おチンポ
は挿入って……んっ♡



……ん
あっ♡



ぶぶぶぶぶ
んあああ
んあああ
んあああ
んあああ

チンポッ♡
かつたいチンポ♡
ぶつとしいチンポお♡

んあああ♡

お
おお!

射精るっ!

ああ♡
チンポ汁キタマ♡

あああ
あああ
あああ
あああ



ふああ♥

ふああ♥
キスッ♥
んちゅっ♥

フロシ♥



大したものだな
よもやここまで
堕ちると

いや この身体だ
随分と溜まっていたの
だろう 色々



はぁぁぁぁぁ♥



また また
腔内あ……♥

チンポ汁
っしゅあゝ♥



んんあああ♥
チンポ ニ本もお♥

通達はした
クックク
しかし哀れなものだ

それで もう
向こうには?



日本には純国産機など
不要なのだよ 特に
不知火式型はな
高性能すぎる

あんなもの
おいそれと日本に
量産されてはかなわん

ぬほおぬほお♥

ケツ♥♥
ケツマン♥♥
チンポお♥



こんなにもまでして
守ろうとした
不知火式型の開発も
結局は中止とは

ひはあああ♥

まあ 気に入る
ことはあるまい

純国産機など無くとも
日本には我が国の
技術を幾らでも売って
やればよいのだ

射^て精^てる^んじ^ん♥

あし♥

チンポ汁^う♥
だいしゆき^い♥

クク そうだな
BETAを相手にするなら
充分すぎる機体が
作れるだけの技術を

あ……♥ああ♥

アハハ♥

はあはあ

うむ
全ては我が

ニア

米国のために

アピ



反則気味ですが線画でP埋め。
オッパイを全面的に押し出した
表紙ってのは作ったことがなかったので、
経験になりました。
もうちょっとダイナミックに
魅せられる表紙を描きたいものです。



↑

PSPのシール用に描いた物です。
テンプレートに乗せているので
印刷するとすぐに使えるように
しました。

← 虎通用に書き下ろした一枚。
やはりオッパイを主張するのは
俺らしさですね。
上が6月頃、下が2月頃、
今見ると結構絵柄が違いますね。



After...

忍

その日、篁唯依の駆る武御雷の動きの違和感に気付けた者は果たして何人いたのだろうか。……自分以外、何人もいなかったのではないかとユウヤ・ブリッジスは決して思ひ上がりではなく、唯依の衛士としての技量や武御雷という戦術機の性能を冷静且つ客観的に鑑みただけでそう感じていた。

このアラスカ・ユーコン基地で最も唯依の力を知っているのは間違いなくユウヤだ。彼女から教わったあの呼吸は、今もこうして不知火武型の呼吸に息づいている。長刀を振るう、斬撃の細やかな動作、タイミングが実感として彼女の強さをユウヤの中に残しているのだ。

だからわかった。

（——違う。今日のコイツは、どこかおかしい）

唐突に持ち上がった唯依との実機演習の話に、それこそ小躍りして喜んだ数日前のことが思い出されユウヤは歯噛みした。

既に米国人や日本人というしがらみを捨て、同じ夢を持つ対等の存在として接してきた相手であっても、やはり一人の衛士としてユウヤはいつか唯依を超えたいと切望していた。しかし彼女の立場が安易な演習など許さない。かつての、一度きりのそれはまさに暴挙であり、イレギュラーな事態だったのだから。

だからこそ、正式に唯依の武御雷と戦えることをユウヤはこの数日間ずっと楽しみにし、頭の中で何度も繰り返し彼女との凄絶な戦闘をシミュレーションし続けてきたのだ。

なのに、どうしてなのだろう。

（動きは確かに鋭い。けど……おまえはこんなもんじゃ——）

不知火武型の振るった長刀が、武御雷の牽制気味に放った斬撃を弾き機体のバランスを崩させていた。殆どの者の目にはそれは純粋に成長したユウヤの手並みとなって見えたりすが、万全な状態の唯依ならばとの思いがユウヤの思考を尖らせる。

タリサやヴァレリオと比較しても、亦（イ）非（ヒ）と比較しても、レオンと比べたって現在こうして自分と斬り結んでいる唯依の腕前は超然と卓越していた。なのに、それでもまだ驕りがある。今の唯依は、少なくともユウヤの知るあの篁唯依ではない。

「……ク、ソオオッ！」

激昂し、ユウヤは操縦桿を一気に押し込んだ。力任せの一撃などそう簡単に通じる相手ではない。が、今日の唯依に対してはユウヤはその力任せをこそ通したかった。

苛立ちが機体の動きを荒々しく、強引なものに変えていく。いつもの唯依ならば、あの日の唯依ならば容易くいなしてユウヤの未熟を叱責していたはず。

それなのに——

「おおおおおおおッ！」

頭にくるくらいあっさり、と、武御雷の長刀は宙を舞っていた。

小手先の技量に頼らず、時には力押しのみ武者らな動きが近接戦の明暗を分けることもあるのは確かだ。確かだが、今の勝利はとてでもないがそんなものではなかった。ただ苛立ちと焦燥、懸念と遺憾な感情とが暴発した結果に過ぎなかった。

そして、そんな一撃で勝ってしまった現実には失望と衝撃を受けながら、ユウヤは不知火武型の頭を軽く下げた。自然とどつてし

まった礼の形が、ひどく虚しく、薄ら寒かった。



「どこか調子でも悪かったのか？」

「——は、……え？」

唐突に。

……少なくとも、唯依にはその声が唐突なものだったよう感じられていた。実際にはユウヤはその前に唯依の名を呼んで呼び止めようとし、なのに反応もなく立ち去ろうとする彼女の側へと駆け寄ってきたのだが、まったく気付かなかったのだ。

熱に浮かされたような思考と身体は、帝国軍斯衛として身につけた全てを消失させてしまったよう唯依には感じられた。

「今日のおまえ、どう考えても変だったぜ。……こう言っちゃなんだが、ちっとも勝った気がしない」

眉間にしわ寄せ、けれどユウヤが怒っているわけでないのは残された思考力からもわかった。彼は、純粹に自分の身を案じてくれているのだ。それは喻えようもなく嬉しいことだったはずで、唯依はほんの一瞬だけ、あの優しい気持ちを感じ出していた。

自分の人生で、おそらくはたった一度きりの恋心。

「……いや、なんでも、無い。大丈夫だ」

せめて今くらいは毅然とした己を保とうと、唯依は必死だった。本当はユウヤの優しさに泣き出してしまいたいくらいなのに、それだけはどうしても出来ないのが悲しいのか、口惜しいのか。

ともあれ、今の自分は彼に心配して貰えるような、そんな人間ではないのだ。だから余計に突き放したような口調になる。

哀れで、惨めで、悲しくて。唯依の中の少女としての部分はひび割れた心の欠片によって絶え間なく切りつけられ、涙の代わりに赤い血を流しているようなものだった。しかしそれも、果たして本当に赤いのかどうか。

「大丈夫だ、って……本当にそうか？ 少し、顔……赤いぜ？」

「……ああ。何も、問題はない。……貴様が心配するようなことなど、何も……う……う……無い……ッ！」

思わず荒くなってしまった語氣に、唯依は申し訳なささと羞恥から居たたまれなくなっていた。

今すぐにも消えてしまいたい。ユウヤの前から、自分という存在を消してしまいたかった。……胸の内に微かに残る恋心の、それはあまりにも切ない最後の願いだった。

「そんなこと言ったって……風邪でもひいてるんじゃないのか？」
風邪、ならどんなにか良かっただろうか。

自嘲気味な笑みを浮かべようとして上手く浮かべることさえ出ず、微かに頬を引き皺らせた唯依はとうに麻痺しそうになっている感覚を総動員して何とかユウヤの目を誤魔化せないものかと苦心した。

が、そうしている間にも、

「——くらくらくッ!?」

ビクビクッ、と。震え、波打ちそうになる身体を抑え込むだけで精一杯なのだ。

激しく痙攣し、疼いている身体を——帝国斯衛としての誇りに彩られていたはずの強化服の中身をユウヤに知られてしまったな

ら、自分はきつと生きてはいられないだろう。しかしそれでも死ぬことは許されないのだ。自分の死後、それこそ彼の身にどのような艱難が降りかかるか。或いは何事も起こらなければそれでいいのだが、確証がない限りは死ぬことすら出来なかった。

だから、耐えるしかない。

「ッ、……ッッ、イ……うあ……ぐっ……！」

「お、おい中尉!?」

唯依、ではなく。……名前でなく階級で呼んでもらえてまだ幸いだったなど、疼きを堪えながら唯依は軽く頭を振った。

「……なあ。その、さ」

不意に、ユウヤは困ったように頭を掻き出した。その彼の、まるで少年のような仕草に胸が高鳴る。疼きが、激しくなってしまうのを止められなくて、唯依は汗ばむ手を何度も開閉させ、太股を擦り合わせた。

「こんな事言うのも照れ臭いんだけど、……その、オレ達、最初の頃は色々あったけど、今では随分と打ち解けることも出来たなって、オレはそう思ってる」

本当に照れ臭いのだろう。ユウヤの視線は宙を彷徨い、頬は微かに赤く染まっていた。

「だから、調子が悪い時くらい……無理せず、そう言って欲しい。そうすれば、今すぐにだってオレはお前を医務室に連れてってやる事が出来るんだ。……だから——」

「だ、い……じょうぶだ！」

それ以上聞いたら、絶対に自分は泣き出して、彼の胸に縋りついてしまう。それだけは出来ないから、唯依は怒鳴るように声を張り上げていた。

いったい何が起こったのかわからないとも言いたげに、ユウヤが呆然とこちらを見つめているのがたまらなく悲しくて、哀惜の慟哭を胸中で張り上げながら唯依は唇を引き結んだ。

「先程も、……言った、通りだ。……貴様が心配するようなことは、何一つ……無い……！」

——だから、もう私を見ないで——と。

「……ッ！ ふ、う……ッ!?」

雷に打たれたかのように痺れる全身を、唯依はまさに綱としか呼びようのない精神力で抑え込んでいた。

知られたくない、見られたくない。

汚れてしまった自分を、目の前の、恋した男にだけは。

(だから……ごめんなさい……ユウ、ヤあ……)

涙も流さず、声も漏らさず、泣きじやくる唯依の子宮の中を、白く濁った液体が満たし流動していく。

膣道を逆流し、溢れそうになるのを堪えんとしても、前後の穴に挿入された玩具からそれぞれもたらされる震動が唯依の意識を飛ばさんばかりに先程からその激しさを増していた。

「……ッ、う、……う……ンッ……う！」

ユウヤと、話しているからだろう。

いったいどこから見ているのか、彼らは下卑た笑みを満面と浮かべ濡えながら、簾唯依という哀れな肉奴隷の痴態を嘲笑っているに違いない。

彼を守るために、彼と自分の夢のために唯依はあの下衆達へ全てを差し出した。なら今のこの惨めな姿はさぞ満足に違いない。

「……ゆ、い？」

いったい何があったんだよ、と。いっそ自分の不自然な態度に



腹を立て、怒ってくれた方がよっぽど楽なのに、ユウヤが浮かべていたのは心底から唯依を心配してくれる、そんな表情だった。

だから、もうこれ以上、

「ッ」

唯依は、ユウヤからの視線に耐えられそうになかった。

「お、おい唯依ッ!」

後ろから聞こえてくる制止の声を振り切るかのように、唯依は全力で、無我夢中で走った。

本当は、もう一つだけ。どうしても話しておかなければならぬことがあったのに。自分の口から、どうしても。

だが、言えなかった。どうしてもそれだけは言えなくて、唯依は逃げることしか出来なかった。

「ひうッ、ぐっ!」

その間も膣内と直腸に挿入された玩具は絶え間なく刺激を送り続けてきている。特に膣内の、唯依の子宮にまで深々と入り込んでいる——何処の馬鹿が開発したかわからない——ソレは、まるで生身の男性器のように太く、硬く、熱く、震えながら白濁とした汁を吐き出し続けていた。

その、所謂射精の度に——

「ひあああぐううううううッ♥」

——唯依の全身を、甘い毒気が襲うのだ。

どんなに否定しようとも、抗いたい、雌の肉に刻み込まれた淫毒が……ココロとカラダを狂わせ、壊していく。

「ッ、……は、あ……はあ、……ふグッ! ……ひあ、はあ、く

ふう……ヒッ……は、あ

息も絶え絶えと壁により掛かりながら、唯依は強化服から着替

えようともせず目的の場所へと急いでいた。

もう、駄目なのだ。

こうなってしまうては、どれだけ強固な意思の力、精神力であろうとも、どうにもならない。

「……ふう、ふ、……うう、……ああ……はあッ♥」

最後にもう一度、唯依は今来た通路を振り向いた。

「う……あ……はあ、……く……う……あ」

そこにユウヤの姿が無いことを、ただそれだけを祈るように確認して、再び歩を進める。

絶望へと向かって。

あの淫らな地獄へと向かって。

なのに、唯依の顔には——

「……ふあ、あッ♥」

彼女自身気付かぬうちに、うっすらと笑みが浮かんでいた。



「いやはや、残念だったねえタカムラ中尉。まさか負けてしま

とは……いや、あれはブリッジス少尉の腕が見事だったのかな？」

何がどう残念なのか。よくも自分を小馬鹿にするための言葉がこうもスルスルと口から飛び出てくるものだ。唯依は感心すらしていた。

「クツクツク。折角ねえ、最後の思い出にと、君の希望通りに演

習のお膳立てを整えてあげたのに。あのような結果では、まだ心

残りがあるのではないかね？」

「……んっ、……ふむ……ふう……ッ……い、え……ちゅぶ、れろ……ちゅるっ♥……ん、はあ……」

最後の思い出、という言葉だけは、多少胸を剔った。

結局ユウヤには伝えられなかった、無情なる夢の終わり。

——不知火式型の、開発中止命令——

あんなに抗ったのに。必死になって止めようとしたのに、今となつてはそれさえも全てが虚しく色褪せてしまっていた。

後悔し、憤激し、嘆いたところで無駄なのだ。それはもはや諦めですらなく、唯依はたまたもうありのまま全てを受け入れることしか出来ない状態にあった。

屈服、なのだろうか。

ともあれ、一度完全に征服され、支配され、蹂躪され……この喜びを刻まれてしまつては、女など何をどうしたところで雌に過ぎないのだろうかと、唯依は自らの乳房を左右から強く圧迫した。

「お、おとおっ！……フフ。やはり、中尉のバイズリはたまらんなあ。こんなにイヤらしい形をしておるのに、崩れず、張りがあつて、なのに柔らかい。……ほ、おとおっ！」

「んっ♥……は、あ」

胸の中で肉棒が震えながら膨れ、圧迫した乳肉を押し返された唯依は甘い声を漏らした。最初の頃はあんなに嫌だった肉棒の匂いも味も、熱も、今ではこんなにも心地よく、好ましい。否定など出来ないくらい、どうしようもなく……虜にされる。

「まさに、乳マンコと呼ぶべきか……！……ふ、う！……こんな、アラスカくんんだりでも……君のような女性を好きに出来るのなら、まったく……悪くない、な！」

「ひゃあああんツ♥……はあ、……い、え……こちらこそ、こんなにご立派なおチンポに……ふあうツ♥……ご奉仕、出来て……とても、幸せ、です……う♥」

かつての自分からは想像も出来ないような、鼻にかかった媚びるような艶声。婚前に淫らな行為に及ぶなど、今このような時世にあつてなお恥ずべき事だと頑なに信じていた筈唯依はどこに溶けて消えてしまったのだろう。

……無理もない。

「はヒイイツ!? ひやつ、はあああああアンツ♥」

膣穴に挿入された“生きたパイプ”が震え、複数の男達のものが混ざり合った精液を子宮の中へと遠慮の欠片も無く注ぎ込んでいく。演習中から果たして何度目だろう。もしこの精液で妊娠したなら、父親は誰になるのだろうと霧のかかった頭でそんなことを考えた唯依は、すぐさまくだらない思考を打ち消した。

それもまた無意味なことだ。

クローン培養技術と生体加工技術によって作り出されたこのパイプ、男性人口の際限無い減少とそれに伴う出生率低下のために考案されたらしいが、考え出した人物は余程の大馬鹿者だろう。

根本の部分に備え付けられた精液タンクに、特殊保存液と混ぜた精液を貯蔵しておくことで数日間生きた精子を射精可能という機能も、こんなもの大真面目に最新技術で開発していたのだと初めて聞いた時は唯依も心底から呆れ返ったものだ。

なのに、今では——

「ひゃふっ♥ キ、キてますっ、流れ込んできますうおチンポ汁たくさん子宮のナカにひいひいイイツ♥ 誰のかわかんない精子がああっ♥ ごちゃ混ぜチンポ汁射精されてますうふう

あとおおとおおとおおッ♥

——そのパイプを四六時中突っ込まれて感じてしまっていた。

演習中も、ユウヤと向かい合っていた話していた時も、己の境遇に絶望し胸中で泣き叫びながら、しかし同時に淫らに喘ぎ、ヨガリ狂っていたのだ。誰のものとも知れない、ただ大量の精液を混ぜ、ブチ込んだだけのそれを子宮で受けながら。そもそもこの場にはいない者の精液すら混ぜられているのだから、妊娠したとしても父親のことなど考えたところで本当に詮無いのだ。

なんて恥知らずな、と。そんな言葉が脳裏を過ぎりはしても、既に心底からそう感じることは出来ない身だった。

「のひっ!? おっ、ふうあああああああッ♥」

絶頂に絶頂、繰り返す絶頂。子宮の中に収まりきらない精液が、汚らしい下品な音とともに溢れ出してくる。

「おふっ♥ ……は、あああ……」

「おいおい、いつまでもそんな肉チンポパイプでよがっていないで、もつとしっかりパイプしてくれたまえよ」

「は、はひい♥」

無邪気な子供のように微笑んで、唯依は自らの胸肉をこね回した。陰茎を抜き上げ、乳房でカリ首を擦るよう、丹念に、愛おしく奉仕していく。

演習後、シャワーも浴びず、着替えもしていない強化服。その片方、左乳房の部分だけを引き裂かれ、露出させた状態での半強化服パイプが、彼らは大層ご満悦らしい。

「お、おとおお……たまらんなあ。この、雌臭い、強化服の中で蒸れに蒸れた汗の匂いがまた……」

「そ、んな……匂い、なんて……ひう、はっ♥ ……ん、くふ、

んあああああああッ♥

「そう言わずに自分でも嗅いでみなさい。さあ、この精液と汗とが混じり合ったスケベな匂いを、下品に鼻を鳴らして」

そう言われるよりも先に、唯依の鼻腔の中には既に淫臭が充満しつつあった。肉棒と精液の匂いに混じった、自分自身の蒸れた汗の匂い。女なら誰もが恥じ、忌避するに違いないものを、

「ンッ……スン、スンッ♥ ……は、ああ……い、やあ♥」

悦んで嗅いでしまっている。下品に、淫らに。

その淫悦が、肉棒を抜く動きを一層激しくし、精液を絞り出すとする媚熱に浮かされた唯依の勢いを増した。

「ふはは！ なんだ、匂いを嗅いだ途端に、まるで獣のようじゃないかタカムラ中尉！」

「まったく、どうしようもない雌犬だな君は。呆れてしまうぞ」

「ひやふっ、ん、ちゅむ……んぶああッ♥ そんな、こと、言わないれくだけはひい……おとおっ♥ ひ、ほおああああッ♥」

見下され、なじられ、侮蔑され……誇りなど汚泥にまみれて、それが、それこそがたまらなくキモチ良いのだ。かつての自分という存在を粉々に打ち壊されていく屈辱が、背徳感が、唯依の中に妖しい火を灯す。

その火はただの小さな灯火からやがて業火になって全てを焼き尽くし、篋唯依だった残骸には肉欲にのみ突き動かされる身体と本能のみが残される。

「フ、クク、ハハハ！ さあ、保存液など混ぜていない新鮮なチンポ汁だぞ！ 受け取りたまえ！」

「よおし、こつちも、射精すぞ！ たつぷりブチまけてやる！ 顔にも胸にも口にも！」



「ひやふうううウんッ♥ くださっ、くださいいいいイイツ♥
チンポお♥ チンポ汁ッ、パイズリで扱き出された濃厚チンポ汁
くらさひいいいいんッ♥」

求め欲する言葉など無くとも、大量の精液は凄まじい勢いで唯
依の顔を、髪を、胸を汚し、口の中へと注ぎ込まれていた。

「んぶっ、ふ、んちゅむうう♥ ……んぐ、ふぶああ♥」

精子の粒の一つ一つまでわかりそうなくらい濃厚なザーメン
を、丹念に咀嚼する。味わって味わって、味わい尽くしてもまだ
足りないとばかりに、飲み込んでからも唯依はまるで反芻でもし
ているかのように口を動かし続けていた。

「フフ。そんなに美味いかね？」

「んは、ひいい♥ 美味ひいれふ……う♥ ヒンポ汁う、美味ひ
くて、らいふきれふう……んッ♥ シング、……んばあ♥」

答えながら、唯依は射精してなお萎えることのない剛直を胸で
再び扱き始めていた。

止まらないし、止められない。

もう自分は堕ちていくことしか出来ないのだから。底の見えな
い淫欲の奈落の闇へと、どこまでも。

(……ごめん。……ごめん、ね)

誰に謝っているのかすら判然としない謝罪を繰り返し、唯依は
微笑む。再び膨張してきた龟头を愛おしげに舐め、尿道に残った
精液を吸い尽くすために口づけた。

「んちゅっ♥ ふう、んむッ♥ ……んう、……ふああっ、まだ
チンポ汁、こんなに残ってますう……♥」

「ハハハ。中尉にはかなわんなあ」

節くれ立った手で頭を撫でられ、唯依は目を細めた。時間の感

覚さえ狂った状態で、無心に、雌になる。

その瞬間、再び子宮の中でパイプが弾けていた。

「ひやうっ♥ ンッ、んおおおッ♥ ふあッ、んほおおおおお
おおおおおおおおおッ♥」

汗と精液に濡れた頬を、一筋の雫が伝った。

その涙の意味さえ刹那に失われる官能の地獄で、唯依の嬌声は
尽きることなく響き渡っていた。

いつまでも。いつまでも。

〈END〉

あとがき

どうもこの本を手にとってくださりまことにありがとうございます。

はじめましての方は始めまして。そうでない方はこんにちは。

寒天です。コミケです。色々締め切りはやかったりしてきついです。

今回は最終的に色々ギリギリな日程になってしまいましたが、

色々学習する部分もありました。次回以降は今回の経験を生かし、

もっと良い本を作れるよう励んで行きたいと思います。

まあ画力ももっとしっかり磨いていかないといけないのですけれども。

そしてこの本が出る頃にはモンハン3が出ますね。

wiiなので微妙なのですが、評判次第ではまた触ってみたいところ。

色々新規要素に溢れてるみたいなので、そこそこ古参ハンター

としてはやってみたいのですけども。と言ってる間にもうサンクリが

きてしまうので、そっちの原稿をしっかりとやりませんとね。

そんなわけで今回の本を手伝ってくれた友人や特に原作まで

やってくださった忌呪先生には感謝してもしきれません。

そんな感謝を胸に抱きつつ、この本を読んでくださった方々も

今後ともよろしくお願ひします。それでは。

奥付

誌名	: 誨淫斯衛
発行者	: 寒天
原作	: 忌呪(黒色彗星帝国)
原作者サイト	: http://imiju.jp/
発行サークル	: 寒天示現流
発効日	: 2009/8/16

※18歳未満の購入、購読は遠慮してください。



2009/8/16

寒天示現流